

要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	野 田 祥 子
主 論 文 題 名 Association of personality traits with rumination improvement following cognitive behavioral therapy in major depression: an observational study (大うつ病性障害に対する認知行動療法に伴う反芻思考の改善と性格特性の関連：観察研究)				
(内 容 の 要 旨) 本研究は、うつ病 (major depressive disorder: MDD) に対する認知行動療法 (cognitive behavioral therapy: CBT) で抑うつ反芻思考 (brooding) の改善に個人差が生じる要因として、性格特性の役割を検証した前向き観察コホート研究である。外来うつ病患者75例を臨床経過と希望によりCBT+通常治療 (treatment as usual: TAU) 群とTAU群に群分けし、主要アウトカムを反芻反応尺度 (Ruminative Responses Scale: RRS) brooding、副次アウトカムをハミルトンうつ病評価尺度17項目グリッド版 (GRID version of the 17-item Hamilton Depression Rating Scale: GRID-HAMD₁₇) とした。性格はTemperament and Personality Questionnaire (T&P) の8因子で評価した。群内解析では両群でRRS broodingとGRID-HAMD₁₇はいずれも有意に低下し、効果量 (Hedges' g) はCBT群でbrooding 0.48、GRID-HAMD₁₇ 1.07、TAU群でbrooding 0.84、GRID-HAMD₁₇ 1.46であった。16週時点の共分散分析ではRRS brooding・GRID-HAMD₁₇・1日服用量 (defined daily dose: DDD) のいずれも群間差は有意ではなかった。 主要解析として、性別・ベースラインRRS brooding・GRID-HAMD₁₇を共変量に投入した群別多変量回帰を行ったところ、CBT群でanxious worrying因子がbroodingのより大きな改善と有意に関連した。一方、self-criticism因子は8因子同時投入で逆方向の所見を示したが、単一因子モデルでは再現せず探索的と判断された。TAU群では、いずれの特性もbrooding変化と関連しなかった。補足的な横断相関では、ベースラインのbroodingと一部性格特性の関連は中等度だったが、16週時点では全体に弱く、抑うつ重症度との相関も小さかった。 以上より、CBT群とTAU群の平均改善差には有意差がなかったものの、CBT群内では性格特性がbroodingの改善量と関連しており、この関連はCBTという治療文脈に特有のプロセスを反映している可能性が高いと考えられた。解釈上の限界として、群割付の非無作為性に伴う交絡の残存、サンプル規模と評価時点の制約、多変量モデルの複雑性がある。 結語として、特にanxious worryingはCBTにおけるbrooding改善を示唆する指標候補となりうるが、確証には十分な検出力を備えた無作為化試験による再現が必要である。				